

又これあり、何ぞかれをみくさと不云乎、答云、たとひ其義もありぬべくとも、古賢者殊秋のはなす、きを賞せり、故柿本朝臣人麿歌云、人みなははぎを秋といふいなわれはおばなが末を秋とはいはむ云云、又諸草おほしといへども、此集のうたの義讀の中に、草花とかきておばなとよむ、これす、きまことのくさなる故也、

〔日本書紀九〕九年○仲哀三月壬申朔、皇后選吉日入齋宮、親爲神主、○中略亦問之、除是神有神乎、答曰、幡荻穗出吾也、於尾田吾田節之淡郡所居之有也、

〔萬葉集十〕秋相聞寄花
吾妹兒爾相坂山之皮爲酢寸穗庭開不出戀渡鳴、

〔冠辭考八〕はたす、き

はたす、きてふは、奈良人となりては、さまざまに意得しにや、うたがはしき事多し、されどもづ紀に幡荻、万葉卷一に、呂麻旗須爲寸四能乎押靡など書たるによらば、秋野の中にす、きは物より高く顯れて、葉も長くては、有なれば、幡す、きと云ならむ、

〔萬葉集七〕雜歌詠草

妹所等我通路細竹爲酢寸我通靡細竹原、

〔萬葉集抄五〕しのす、きとはほにいでぬす、きをいふ、しのと云はしのおと云詞也、

〔袖中抄十九〕すぐるのす、き

あはづ野のすぐるのす、きつのくめばふゆたちなづむ駒ぞいはゆる

顯昭云、すぐろのす、きとは、春のやけの、す、きのすゑのくろき也、ゑもじを略してすぐろと

いへる也、○下略

〔袖中抄十九〕ほやのす、き